

## 梁元帝評伝（一）

福井佳夫

### 一 文武の道は絶えたり

江陵をめざせ

西魏軍の総攻撃は、いよいよよちかい。

江陵の城門をまもる梁軍の兵士たちは、緊張感をたかめていた。

それにしても、西魏軍の江陵来襲ははやかった。西魏の言いぶんはこうだ。わが国が派遣した使者が、梁の都の江陵で北斉の使者とはちあわせした。そのとき梁の元帝は北斉の使者を優遇し、わが国の使者を冷遇した。さらに、元帝は自国（梁）に有利な国境改定を提案してきたうえ、その書状の字句も不遜だった。これらのことは、わが国への背信行為にあたる——と。こつした事がらを理由として、西魏の宇文泰が江陵への侵攻を表明したのは、つい二か月ほどまえのことにすぎない。

宇文泰はおもったのだろう。わが西魏に対する元帝の不遜な態度は、「わが国に仇なす」北斉の援助を頼みにしているから、というのはあきらかだ。梁は北斉と同盟して、わが国にあたらうとしていたのだろう。「恩義ある」わが国から北斉にのりかえようとする元帝は、なんとこの不埒なやつであることが、と。そこで彼は怒りを発して、つぎのようにいったという。「古人は、天からみはなされた者は、もはやどうしようもない」というが、蕭繹（元帝）こそ、そのことばどおりのやつだ」。

かくして宇文泰は五五四年、すなわち承聖三年の九月下旬（旧暦）に江陵への侵攻を命じた。その命に応じて、たちどころに兵五万よりなる遠征軍が編成された。人口のおおくない西魏としては、かつてないほどの規模である。総大将として六十二歳の老将、于謹が任命された。かずかずの武勲にかがやく柱国大將軍にして、常山公である。そしてその于謹の脇をかためるのは、宇文護や楊忠、韋孝寛、長孫儉たちだ。いずれも、百戦錬磨の武將や参謀であり、西魏の総力を結集した布陣だといってよい。

西魏の遠征軍は、はやくも十月九日に長安を進発していった。出陣にあたって于謹は、梁の臣民にむかつて檄文「伝梁檄」を公布した。それは、

梁の文武の官たちにつげる。

そもそも国をおこす者は、礼儀と信義を基本とせねばならぬ。貴国の君主たるや、さきに侯景が乱をおこせし当初は、わが西魏と同盟し協力しあつてきた。ところが乱がおさまったいま、とつぜん信義にそむいて「わが国に仇なす」北斉の高洋と徒党をくんでしもつた。そのうえ高洋の使者をむかえては、貴賓室にまねいたり、わが国の意向をあなどつては、わが辺境の吏民をおびやかしたりしている。

わが皇帝は、天の意につつましみたがつており、けつしてかかる非道な仕うちにあまじたりはせぬ。つ

いては、軍士たちにそれぞれ命をくだし、わが朝の意志を奉持させることにした。わが西魏の軍十万は、これよりただちに貴国の江陵をめざし、進攻する所存である。

告梁文武衆官。夫作国者罔弗以礼信為本。惟爾今主、往遭侯景逆乱之始、日結我国家以為鄰援。今忽背德、党賊高洋。引厥使人、置之堂宇、傲我王命、擾我辺人。我皇帝龔天之意、弗敢以寧。分命衆軍、奉揚廟略。凡衆十万、直指江陵。

というものだ。この檄文の内容は、もちろん宇文泰の意をくんだものである。文中の「高洋の使者をむかえては、貴賓室にまねいたり」（西魏の使者を冷遇したことだろう）というのは、今年三月の、そして「わが国の意向をあなどっては、わが辺境の吏民をおびやかしたり」（不遜な国境改定を申しでたことだろう）というのは、今年七月のできごとである。そうした傲慢な態度に対し、わが皇帝（形式的には西魏の恭帝をさすが、じつさいはもちろん宇文泰の意志である）が懲罰をあたえる、というのが檄文の趣旨である。

だが、以上は名目上のことにすぎない。常識的にかんがえて、慎重さをもつてなる宇文泰が、使者が冷遇された等の些細なことで、五万もの大軍を進発させるはずがないからである。宇文泰は、梁内の侯景の乱や皇族どうしの内輪もめを、じつとおくからながめてきた。そしてチャンスをつかがいながら、着々と梁進攻の準備をしてきたはずだ。

じつさい、配下の長孫儉は、以前から江陵の攻略法を研究し、その早期の実行をしばしば宇文泰に進言していた。今回、宇文泰はあらためて、長孫儉に江陵進攻についての意見を徴してみた。すると彼は、大要つぎのようだったのである。

……蕭繹は血族相剋ばかりして、民衆からもきらわれています。わが国は、おおくの武器や食糧の備蓄を有

しており、もし大軍で江陵を侵攻したとしても、輜重になんの心配もありません。弱者をあわせ愚者をせめるのは、兵法の鉄則でもあります。わが国はすでに蜀地をとっておりませんが、さらに江陵まで制圧すれば、天下統一の日もまもないことでありましょう。

これをきいて、宇文泰はたいへんよろこんだ。たしかに長孫儉のいうとおりだ。もうじゅうぶん、梁侵攻の機は熟している。いやそれどころか、熟しすぎているかもしれない。よし、いまだ。機は逸すべからず。こうして宇文泰は、元帝の使者冷遇や不遜な国境改定申し出への懲罰を大義名分にかかげ、江陵を急襲することを決断したのだった。

遠征軍出発の日、宇文泰は青泥穀にまで見送りにきて、于謹たちを上げました。そのとき庾信がたまたま、江陵から元帝の使者として長安にやってき、当地に滞在していた。宇文泰は見送りの席で、その庾信にたずねたという。「わが軍はいまから貴国に進撃し、湘東王の蕭繹をとらえて、この長安の地で博士にでもしてやるうと。もうのだが、われらの作戦、うまくゆくと思いますか」。庾信が「きつと成功なさるでしょう。でもそのとき、湘東王さまがこの私めを不忠者とお思いにならなければよいのですが」というや、宇文泰はわらってうなずいた。このエピソード、宇文泰の自信をしめすものと解すべきだろう。

#### 梁廷の油断

長安出発から一カ月もたたぬ十一月五日、宇文護と楊忠がひきいる先発部隊が、はやくも江陵郊外に到着した。そして于謹の本隊はそれから九日おくれて十四日に、江陵に姿をあらわしたのである。つまり西魏軍は、わずか一カ月余で関中の地をかけぬけてきたのだった。五万という大軍であることをかんがえれば、たいへんなスピー

ドだといってよい。これも、長孫儉があらかじめ、長安から江陵への行軍ルートや輜重隊の配置などを、慎重に研究していた成果なのだろう。

もし西魏の進軍や戦いがながびいたら、北斉はこの戦いにまぎれて漁夫の利をえようとするだろうし、また梁の王僧弁や王琳らの將軍もお家の一大事と、江陵をめざしてくるにちがいない。それらのこわい連中が容喙ようかいしてくるまえに、さっさと江陵を攻略してしまわねばならぬ。こつした事情を勘案して、于謹は行軍をはやめたのだらう。

予想外のはやさで襲来した鉄面の北方軍団を目にして、江陵の人びとは、西魏の侵攻がうわさや誤報などではなく、うごかぬ事実であると信じざるをえなかった。

というのは、当初、江陵の地では情報が錯綜したこともあって、西魏の遠征軍がやってくることなどありえないと、主張する者がおおかつたからである。

西魏の軍がせめてくるというしらせは、すでに于謹進発後まもなく、梁廷にとどいていた（また于謹は梁の臣民にむけた檄文も発していた）。だが当初、元帝周辺はこれを本気にせず、誤報だとうたがう者がすくなくなかった。

江陵の諸將中、もっとも識見すぐれた胡僧祐でさえ、「いま西魏との関係は良好ですので、侵攻してくることなどありえませぬ。きつと誤報でありましょ」と主張していたほどだ。前年に西魏を訪問していた王琛も、「昨年、宇文泰と会見しましたが、そうしたようすはありませんでした」といつていた。彼らは、「檄文にいうような」元帝が使者を冷遇したこと、勝手な国境改定を提案したことぐらいで、西魏が出兵するはずがないとおもいこんでいたのである。

そうした油断は、元帝が股肱の臣とたのんでいた王僧弁も、似たようなものだった。于謹の軍が到着したのを目にした元帝は、「いそぎ救援にくるように」と建康にいた僧弁に勅をだした。だがその勅をよんでも、僧弁はつぎのようにかたただけだった。「西魏の軍は剽悍であり、じつにてごわい。そこで戦備がととのいしだい、わしは「江陵でなく」漢江にむかって、やつらの補給路をたちきることにする。遠征軍は千里をゆくのも、食糧不足になりやすいものだ。まして、やつらは数千里も長駆してきている。補給路をたてば、きつと退却することじやろ」と。西魏軍が到来したという報をうけてさえ、かく「補給路をたてば、きつと退却することじやろ」とのんきにかまえていたのだった。こうして僧弁は、元帝の緊急の救援依頼にもかかわらず、江陵に直行しようとしなかったのである。

そもそも元帝自身、自分の言動が今回の西魏の急襲をまねいたとは、信じかねる思いだったろう。西魏の使者を冷遇したり、国境改定を提案したりしたぐらいで、なんで長安からわざわざ大軍が遠征してくるのか。なにかのまちがいでないか。きたとしても、たんなる軍事的示威にすぎず、どうせすぐ撤退することだろう——ぐらいの感覚だったろうとおもわれる。自身の不遜な言動が、宇文泰にうまく利用されて、かく危地におちいつてしまったのだが、元帝はおそらく、そうしたことには気づいていなかった。そのため、このときでも元帝はなお、すきな『老子』について臣下に講義をしたり、詩を吟じていたりしていたのだった。

## 市内突入

江陵の郊外に陣をかまえる、西魏の総大将于謹のほうは、余裕たっぷりである。

わずか三十五日で江陵に到着した于謹は、途中、襄陽の近郊で、敵の梁元帝の甥である蕭詧（しやうか）の軍も合流させ

ていた。じっさいの戦闘ではたいして役にたたないにしても、梁室の蕭簪の軍をも傘下におさめるというのは、西魏軍にはたいへん有利になるはずじゃ。これで、こたびの遠征は、わが西魏軍が侵攻するというだけでなく、「身内さえ離反するような、不徳の元帝を討滅する」という名分もたつというものだ。それにしても、なんと梁室のおろかなことが。こんなに身内どうしでいがみあっているようでは、とうていわが精強なる西魏軍の敵ではないぞ。于謹はこうおもって、内心にんまりとしていたことだろう。

江陵到着後、于謹はすこし時間をおいた。我われが短時日で到着したせい、北齊や梁の救援軍は、とうぶんやってきそうにない。とすれば、いまのうちに將兵の休息かたがた、後顧の憂いをたてておこう、とおもったのだらう。于謹は進軍の途上で、江陵周辺の要塞を陥落させ、梁の斥候たちもとらえていたが、さらに到着後、江陵城をおおつように囲みをつくって、外界との連絡をたちきつた。さらに、市内から梁軍がうってでてくるや、すぐこれを撃破したけれども、于謹はなお自重して、市内への突撃は命じなかった。こうして慎重、かつ周到に江陵襲撃の準備をととのえたのである。

これだけやっておけば、もうじゅうぶんじゃ。本隊が江陵に到着して十八日目、于謹は満を持して、全軍に総攻撃を命じた。ときは、歳もおしつまった十二月二日。南方の江陵にしては寒気きびしい日であった。

たちまち市内の各門の周辺で、喊声<sup>かんせい</sup>があがり怒号がとびかいた。戦闘がはじまったのである。城門を衝車でつきやぶって、市内に突入しようとする西魏軍、これを阻止せんとする梁軍。西魏の兵は市外から、雨あられと矢をふらす。これはたまらぬと梁の將兵、家の扉をはずして楯にする。城門をはさんで、一進一退の攻防がつづいた。

南のほうの枇杷門に、ふいに梁の元帝があらわれた。おそらく戦況が気になって、臣下たちがとめるのもかま

わず、内城のなかからでてきたのだろう。元帝は門のそばまで足をはこんで、兵士たちを鼓舞している。

元帝は心中おもっていたことだろう。精強をもってなる西魏の軍勢。これを撃退できるなどとは、もとよりおもってはあらぬ。ただ、なるべく戦いをながびかせて、時間をかせいでほしい。四方に伝令を発して救援を要請しているが、まだ救援の軍は到着しておらぬ。王僧弁の軍がやってくるまで、なんとかもちこたえてくれれば――。元帝はいのるような気もちで将兵をばげまし、城門の戦闘をみまっていたことだろう。

このときかどうかはわからぬが、梁軍は枇杷門での戦いに、象を出撃させたという。嶺南（広東かベトナムあたり）から献じられた二頭の象に鎧よろいを着せかけ、背上には櫓やぐらをくくりつけた。そしてながい鼻にたばねた刀をつけ、昆崙奴に馱よこさしめて（櫓のなかにいたのだろう）、戦いの場につれたのである。西魏の兵士たちは、みなれぬ巨大な珍獣におどろいたかもしれない。しかし、勇敢な楊忠がこれに矢を射かけると、二象はクルツと後ろをむいて、さっさとにげだしてしまったのだった。

そうしたなか、梁軍のなかで奮闘いちじるしいのが、六十三歳の老将胡僧祐である。彼はかつて元帝に、都は建康でなく、江陵とすべきだと進言していた。その結果が、こうした西魏軍侵攻という事態となったので、自責の念にかられていたのだろうか。あるいは過曰、西魏軍がくるはずがないといったこともあり、責任を感じていたのだろうか。市外から西魏軍の石や矢がとびかうなか、彼は疲れもみせず、昼夜にわたって配下の将兵たちを督励し、西魏軍の市内侵入をふせいでいた。

ところが、その僧祐がとつぜんたおれた。流れ矢が命中したのだ。即死。あつというまに「胡僧祐死す」の報が、あちこちの将兵たちにつたわった。彼のおかげでもっていたような梁軍である。矢がささり血でまみれた僧祐の死体を目にした者たちは、はげしく動揺し、また涙をこぼし、士氣が一気にしぼんでしまった。



その機をまっていたかのように、西魏への内応者が西門の守備兵にきりつける。そして、さっと城門をひらいた。すると、西魏軍はここを先途と城門をけやぶって、市内へ侵入したのである。そこからあとは一瀉千里だった。剽悍な西魏の将兵たちが、城門から怒濤のごとく市内へながれこみ、梁の兵たちをけちらしていた。かくして西魏軍優勢のうちに、夕暮にちかづく。北門周辺の梁軍は、南門が突破されたときいてもなお戦いをつづけていたが、夜となり、他の門が突破されたときくや、蜘蛛の子をちらすようににげだしたのだった。

いっぽう、敵軍が市内に侵入したとするや、元帝は太子や王褒、謝答仁、朱買臣らとともに、あわてて内城へにげこんだ。そしてついに「もはやこれまで」と観念した。元帝は汝南王大封と晋熙王大圓を和議の使者としておくり、于謹に講和を請おうとしたのである。この二王は、ともに殺害された簡文帝、すなわち元帝の兄蕭綱の息子だった。使者といっても、実態は人質にすぎない。元帝は自分の息子でなく、兄の息子をさしだして和を請うたのである。

### 書物炎上

夜になった。まだ于謹からの返事がこないまま、太子や謝答仁らは軍議に熱中していた。

彼らが気づかぬうちに、奥の間にひとり座していた元帝は、ふいにたちあがった。そして、おぼつかない足でりで東閣竹殿にはいつてゆく。

その東閣竹殿には、十四万巻にのぼる古今の書物が蔵されていた。読書すきの元帝が収集した書物はもちろん、侯景を殺害した王僧弁が、廃墟となった建康の宮中からはこんできた書物八万巻も、そこにふくまれている。元帝はそれらの書物を指さし、舎人の高善宝に「これに火をはなて」と命じたのである。

高善宝がいわれるまま火をはなつや、いきおいよく書物がもえだした。太子や王褒らが奥のほうで火の手があがったのに気づき、はしりよってきたときには、もう手のほどこしやうがなかった。このときの元帝は、絶望のあまり正気をつしなっていたのだろつか。茫然とする王褒らをよそに、元帝はふらふらと、はげしくもえあがる火中にとびこもうとした。「陛下、なにをなさいます」。宮女や左右の者たちが、あわてて制止した。

するとこんどは、元帝、そばにあった宝剣をとって柱にきりつけ、へしおった。そして

「文武の道は、今夜つきてしまったのだ」

と嘆じたのである。

後日、元帝は臣下から、「なぜあのかき書物をお焼きになられたのですか」ととわれた。すると元帝はつぎのようにこたえたという。

「私はこれまで万巻の書をよんできた。だが、それでもこの始末じゃ。だからやきすてたのだ」

ここの「文武の道がつきる」云々はどういう意味か。一説によれば、書物（文）をやき宝剣（武）をおったことをさすのだという。だがこのときの元帝の行動、書物をやいたことにくらべ、宝剣をおったことは、いかにもついでにすぎぬ印象がある。くわえて後日の臣下の質問も、宝剣をおったことはふれず、ただ書物をやいたことについてだけだった。すると、「文」と「武」を対等の二物とする見かたは、いささか疑念があるといわざるをえない。

そもそも中国では「文武の道」とは、周の文王と武王のさだめた礼楽や政治制度のことをいう。これは、孔子もたたえた理想的な統治システムをさしており、いわば文明そのものといってよい。ここでの場面では、文（＝書物）と武（＝宝剣）とするより、こちらに理解したほうが、むしろふさわしいだろう。元帝にとって、書物と

はその文武の道（＝文明）をやどした入れものだった。その入れものたる書物をやいたということは、文武の道がついてたということにほかならない。

では、元帝はなぜ入れもの（＝書物）をやいたのか。元帝はいう、「万巻の書をよんできた。だが、それでも」云々と。おそらく元帝は、自分を文武の道の体現者に擬していたのだらう。かく書物をよみ、文武の道を体現した自分であれば、きつと天もご加護したまうにちがいない。ところが、その自分が野蛮な胡族にやぶれてしまった。こんなことがあってもいいのか。天は自分をご加護したまわず、書物もなんの役にもたたなつた。ああ、もうおしまいだ。自分も、そして文武の道も――。

こうおもつて元帝は、文武の道の入れものたる書物をやいたのだらう。すると、もえあがる書物をみつめる元帝の隻眼（元帝は年少のころに片目を失明していた）には、紅蓮の炎とともに、自分を加護してくれなかつた書物や天への、絶望や憎悪の情もやどっていたのではあるまいか。

こうした元帝の考えは、自意識過剰といふべきであり、非難されるべきものである。この短気で愚昧な行動が、中国の文明にどんな甚大な災禍をもたらせたかは、またあとでかたることにしよう。

### 陥落の夜

さて、ようやく正氣をとりもどした元帝は、御史中丞の王孝祀に命じて降伏の書状起草させた。

すると、謝答仁と朱買臣のふたりが、元帝をいさめる。「市内にいる将兵たちは、まだまだ元氣です。暗闇に乗じて敵中を突破しようとするれば、西魏のやつらどもきつとおどろくでしょう。そして長江のほつにはしつてゆき、渡江しさえすれば、味方の任約の陣地にゆきつけましょう」。だが元帝は騎馬がうまくなかったので、「きつ

と失敗するだろう。恥のうわめりをするだけだ」といつて却下した。

答仁が「自分が陛下をお助けしますので、ぜひ」とくいさがるので、元帝はいったんひきさがった。そして信頼する側近の王褒に、どうしたものかとたずねた。すると王褒はいった。「答仁はあの侯景の家来でした。なんで信用できません。あやつに功をたてさせるぐらいなら、降伏したほうがましですぞ」。

だが、あきらめぬ答仁は、さらにあらたな提案をかたつた。「降伏せず市内の要塞を確保すべきです。そうすれば、まだ五千人ほどの軍勢をあつめられますぞ」と。すると元帝は、それはよい考えだといい、答仁に城中大都督の官をさづけ、さらに自分の娘を嫁にやると約束した。ところが、しばらくして元帝は不安になり、王褒をめてこの計画を相談した。するとまた王褒が反対したので、けっきょく元帝は答仁の計画を中止させたのである。答仁はなにとぞなにとぞお願いし、元帝の部屋にはいろうとしたが、もはや入室もゆるされなかった。彼はあまり声高にさげんだせい、喉から血をはきながら、すすすこたちさつたのである。

このあたり、元帝の迷いがよくあらわれている。謝答仁の提案に賛同したかとおもえば、王褒の反対によって、すぐ前言をひるがえしている。降伏すべきか抵抗すべきか。両者のはざまで元帝の心は、右に左にとゆれうごいていたのだろう。もっとも、こうした元帝の優柔不断ぶりは、すでに西魏の指導者たちにもいられていた。すなわち、長安を出立するまえ、于謹は配下の長孫儉に対し、つぎのようにかたっていたという。「あの蕭繹は臆病で能なしだ。またいたずらに狐疑するばかりで、決断力もとほしいやつじゃ」。今回の江陵急襲にあたって、于謹は梁の内情だけでなく、元帝の性格まできちんと把握していたのである。

じつさい元帝はまよっていた。彼の心中で、「こんなやつらども、すぐ撃退してくれよう」という強気と、「江陵が陥落するかもしれない」という弱気とが、交錯していたのだろう。そのため、彼のくだす命令も迷走してい

た。王僧弁や王琳には援軍を要請しながら、なぜか陸法和には、「自力でじゅうぶん撃退できる。そちは、そこをつぐな」といつてよびよせなかった。また夜空をながめて、「客星が翼宿と軫宿に侵入したから、今回の戦さはやぶれるだろう」と不吉な予言をかたったり、市内で火災が発生するや、ひとりの婦人を犯人ときめつけてころし、その死体をさらしたりした。さらに西魏軍の動向を気にしながら、『老子』の講義をやめたり再開したりし、また内城をでて市内のあちこちに居所をかえたりもした。これらの言動、いずれも元帝のあせりをしめすものといつてよからう。

くわえて江陵政権では、この期におよんでも、臣下どうしの不信感が深刻だった。なかでも王褒は、ことごとく謝答仁の提案をはねのけて、元帝に抵抗せぬようすすめている。王褒の「あやつに功をたてさせるぐらいなら、降伏したほうがましですぞ」の発言など、梁の興亡や元帝の生死などより、謝答仁の功を無にするほうに熱心だといわざるをえない。

だが元帝は、そうした王褒を信頼していた。この直後、王褒の本心があきらかになるのだが、このときの元帝には、臣下のおもわくなど、いちいちよみとる余裕もなかったのだろう。

やがて、于謹が簡文帝の息子でなく、元帝の太子蕭元良を人質にしたいといつてきた。そこで元帝は、王褒を使者として太子をおくらせた。この王褒は、詩文でも文学史に名をのこす人物であるが、当時は書の達者としてもしられ、西魏にも腕前がなりひびいていた。そのためだろう、于謹の陣中にやってきた王褒にむかつて、于謹の息子がなにかいてほしいと、紙筆をさしだしたのである。すると王褒は、

柱国大將軍・常山公于謹どのの家奴、王褒

と署したのだった。

この行動は、于謹への諂諛であり、自身の保身をねらったものにちがいない。もちろん元帝への裏切りでもあるのだが、しかし逆にかんがえれば、機転がきいた行いだといえなくもない。すると、さきに王褒が謝答仁の提案にことごとく反対したのも、ただ答仁が信用できなかった（答仁はたしかに、もと侯景の家来だった）だけではなかったかもしれぬ。江陵陥落ののち、「あの夜、答仁らの抵抗をやめさせたのは私です」といえるよう、布石をうっておいたのかもしれない。

というのも、つぎのような後日談があるからだ。この後、江陵は占拠され、元帝以下のおおくが殺害され拉致されるのだが、そうしたなか王褒も虜囚となり、はるばる長安まで連行された。ところが王褒は、長安の地で宇文泰から歓待され、その後も手あつい待遇をうけることができたのである。宇文泰はいったという。「私と貴殿とは遠縁じゃ（泰の母は王氏の出だった）。じゃによって、これから親戚のようにおもってくれ。故郷をはなれたといつて、くよくよすることはないぞ」と。こうして宇文泰は、王褒を高位につけるなど厚遇しつつ、おかげで王褒は自分が囚われの身であることをわすれたという。

そうした彼の安楽な後半生は、このときの機転ある行動に由来していたといえなくもない。そういえば、彼の祖父の王俟も、出処進退がたくみな人物であった。宋齊交替のさい、彼は巧妙にたちまわって、宋の重臣でありながら、あたらしい斉朝においても栄華をほしいままにしたのである。目先がきく王褒の性分は、この祖父由来のものだったのかもしれない。

#### 叔甥の争闘

しばらくして、元帝は羽儀や文物をとりさり、素衣で白馬にのって東門からでてきた。降伏するのである。こ

のとき彼は、おのが剣をぬいて門扉にうちつけ、「蕭世誠（世誠は蕭繹のあざな）はこのざまとなった」といったという。西魏の兵士が元帝の姿をみとめるや、塹壕をわたってきて元帝の馬の轡をひき、白馬寺の北までつれていった。そこで元帝の駿馬をとりあげ、驚馬に交替させる。そして屈強の胡人に命じて、元帝の背を扼（やく）してまえへすすませ、于謹のまえにひきすえた。そして于謹にむかつて拝跪せしめたのである。プライドのたかい元帝のことだ。覚悟していたとはいえ、屈辱的なことだったろう。

つづいて甥の蕭簪が鉄騎兵に命じて、元帝をおのが軍営につれてこさせた。そして元帝を黒の帳幕でこった一室のなかにほうりこんだ。そのなかで蕭簪は、おもうぞんぶん叔父の元帝を罵倒したのだった。

このとき蕭簪は、元帝にどんなことをいったのだろうか。

おそらく元帝が嫉妬ぶかく残忍であり、そのためおおくの親族や臣僚を殺害してきたことを、つよくなじったのだろう。

蕭簪にとっては、元帝は叔父というより、恨みはなはだしい仇敵であった。そもそも蕭簪は五年まえ、元帝が派遣した軍においつめられ、あやうく敗死させられるところだった。だからやむなく、西魏に救いをもとめたのだった。

そのほか親族だけでいえば、つい四年まえも仲のよかった「蕭簪の兄の」河東王蕭譽が、この元帝の命によってころされている。さらに長兄蕭歡の子、豫章王蕭棟（父蕭統の孫。蕭簪には甥にあたる）も幼児だったが、元帝の命により朱買臣によって溺死させられた。そのほか、武陵王蕭紀（元帝の弟）とその息子、また桂陽王蕭慥（遠縁）たちも、元帝にくまれてころされている。

なかでも、蕭紀父子を殺害したときのやりかたは、元帝の冷酷ぶりをよくしめすものだ。

元帝は自分の弟、蕭紀をばげしくにくんだ。蜀地で自立して自分よりさきに天子を号し、さらに東下してわが江陵を襲撃しようとしたからである。そのとき元帝はどうしたか。あろうことが、敵の敵は味方とばかり、西魏に援助をもとめたのである。彼は宇文泰と同盟して西魏の軍を蜀地に侵入せしめ、蕭紀の根拠地をおびやかしたのだった。血族の弟を撃滅させるために、夷狄の西魏と手をむすんだのであり、本末転倒もはなはだしい行為だといわねばならない（もつとも、蕭簪もこれよりまえ、やはり敵の敵は味方の論理によつて西魏側にくみし、いまでも于謹の軍に合流しているのだが）。これによつて優位にたつた元帝は、命乞いする蕭紀にいつさいの同情をしめすことなく、その第五子の円満ともども斬殺せしめたのだった。

またその殺害後も、弟の籍を蕭一族からぬきとり、「饗饗」（神話に登場する、財貨や金銭をむさばる怪物の名）という姓にあらためたという。死んだあとも、辱めをあたえたのである。

さらに、蕭紀の息子の円照と円正に対しては、牢獄にとらえたまま食物をあたえることなく、じわじわと餓死させたのだった。獄中の二人、最期は飢渴のあまり、自分の腕をかじつて血をすすつたすえ、こときれたという。「繹よ、おまえは盜蹏か、それとも桀紂か」。蕭簪はこういって、叔父をのしつたかもしれない。

だが、元帝はこれで反省し、意気阻喪するような男ではない。それどころか、おおいに腹をたてた。西魏にはない。蕭簪に、である。

……自分が営々とあつめてきた書物。いまはすべてもえつき、祝融の神に献上するはめになった。さらに父（武帝）が重視され、今日までまもりつづけてきた礼楽の伝統。これも、西魏軍の馬蹄によつてふみつぶされてしまうことだろう。おそらく自分の命も、ながくはあるまい。しかしそれにしても、にくいのはあの甥っ子、簪のやつだ。西魏と同盟するとは名ばかり、じつさいはその軍門にくだつて、このわしを襲撃してかかるとは。



あまつさえ、さきのあの罵倒はなにことだ。裏切り者のくせにすきかってなことをいいおって——。元帝の心は諦観どころか、憎悪の情でにえくりかえっていた。なんとか、この憂さをはらしたい。はらさないで死ぬものか。

翌三日、おもわぬチャンスがころがりこんできた。総大将の于謹は、長孫俊に命じて、江陵の内城にはいつて支配下におくよう命じたらしい。いい機会だ。元帝は、でかけようとする長孫俊にむかって、「市内に黄金千斤をうめてある。これを貴殿にさしあげたい」といった。俊が元帝をつれて内城にはいるや、元帝は黄金のことはそっちのけにして、昨夜蕭簪からどんなひどい罵倒をあびたかを、執拗にうったえた。たぶん、甥の蕭簪は不実な人間であるということ、叔父の自分にもこれまでけしからぬ振るまいをしてきたこと、そして昨夜自分がいかにつらい思いをしたかということなど、元帝は滔々とかたつたに相違ない。

これで憂さがはれた。さんざん甥の悪口をいっただ最後に、元帝はいった。「さきほどの黄金のことはうそじゃ。この蕭簪のひどい仕うちを、貴殿にわかつてもらいたかったのじゃ。そもそも天子たる者が黄金を地中にうめることなど、するはずがないではないか」。

長孫俊は、このとき六十三歳。今回の江陵征討では、影の功労者だといってよい。拓跋氏の枝族の出身で、容貌魁偉の篤実な武人だ。私室にいても終日儼然としていたという。そうした謹厳な男だった俊、たぶん黙然として、元帝のつきることのない饒舌をきいていたことだろう。そして、元帝の最後のことばをきくや、なにもいわず元帝を衣服庫のなかにおしこんだのである。

最期の日々

これ以後、元帝は幽囚されたまま日をすごす。この間は、ただ飲酒と詩作とで時間をつぶしていたようだ。現在、処刑をまちながらつくったとおぼしき詩篇が、四篇ほど残存している。以下、それを紹介してみよう。

その一は、

「舜がつくった」南風の曲はもはやつたうこともなく

南風且絶唱

西陵の「曹操のための」歌舞もひどくかなしげだ

西陵最可悲

私はいまにも蒿里にゆかんとし

今日還蒿里

封禅することもないまま世をさるのだ

終非封禅時

というものだ。「南風」は舜がつくったとされる楽曲。「西陵」は曹操の墓のこと。曹操は「自分の死後は月に二日、歌舞をしてわが西陵の墓をながめよ」と遺言したという。そうした英雄ゆかりの楽曲や歌舞とも、いまや自分とは関係がなくなつた。自分は封禅の儀をおこなう名君になれぬまま、ひとり蒿里、つまりあの世に旅だつてゆくのだ、という。いわば今生への惜別をのべた内容だといってよからう。

その二は、

人生には厄運がつきもので

人世逢百六

天道もつねに不動であることはいえぬ

天道異貞恒

自分は虫けらとちがうなどと、どうしていえよう

何言異螻蟻

いまや一旦にして大鵬ではなくなつてしまつた

一旦損鵬鵬

というもの。「人世」と「天道」、「螻蟻」と「鵬鵬」を対置させた対偶のなかで、自分の不遇をかたっている。

自分は厄運のため、雄大な大鵬（鵬）。『莊子』逍遙遊の有名な故事をふまえるのだらう。から、虫けら（螻蛄）におちぶれてしまったというわけだ。元帝の失意をものがたるものだらう。

その三は、

松風は曉闇のなかでかなしげにふきよせ

霜や霧が夜になつてからおりてきた

ものさびしいことだ、千年ののちとなつては

黄帝のいました台であつても、だれもはばかりことがない

というものだ。この詩は前二句をみると、深夜につくつたようである。末句の「軒轅台」は『山海經』大荒西經の、後世の人びとは黄帝を尊敬するあまり、黄帝のいました台にむけては、矢を射かけなかったという故事をふまえる。ここではそれを反用して、自分が死んだあととなるや、後世の人びとはだれはばかりことなく、わしの墓に矢を射かけるのだらうな、と暗にのべている。くらい雰囲気がただようなかでも、とくに陰鬱な感じがつよい詩だといえよう。

その四は、

冥界においてはすぎさる歲月もなく

いまが秋だとも春だともしれぬことだらう

光武帝を埋葬した原陵のあたり、五樹の杏がはえているが

いまは「とむらうひともなく」たがやす農夫がいるだけだ

というものである。「夜長」はおそらく、永遠の間たる冥界を暗示しているのだらう。すると初二句は、冥界で

松風侵曉哀

霜霧当夜来

寂寥千載後

誰畏軒轅台

夜長無歲月

安知秋与春

原陵五樹杏

空得動耕人

は永遠の夜がつづき、時間の流れもないという意になる。そして三・四句で、元帝は「みえるはずもない」後漢の光武帝を埋葬した原陵を脳裏にうかべて、いまはとむらうひともなく、農夫が鋤<sup>く</sup>をふるっているだけだろう、と想像しているのである。

この四篇、いずれも暗鬱な情緒にみちた詩だと評してよい。さきの二篇は自己の生涯をふりかえり、あとの二篇は故事を叙しながら、自分の死後はこうであろうな、と想像したものである。これらの詩で元帝が舜や曹操、黄帝、光武帝らの故事を引用しているのは、彼がこうした英雄や名君を意識していたからだろう。後述するが、元帝はまことに、名声を渴望した男だった。

とくに注目したいのは、第二篇である。ここで元帝は、自分は厄運にであつたため、大鵬から虫けらのごとき身におちぶれてしまった、とのべている。つまり元帝は、現在の悲境は自身がまねいたものではなく、厄運にであい、天道も不動でなかったためにこうなった、とかんがえているのである。自分の失敗は、厄運にであつたからであり、おのが言動には過誤はなかった、といたいのだろうか。これは、「役にたたず加護もしてくれなかったから、書物に火をかけた」というのと、相似した考えかただといってよい。その意味ではこの詩は、自身を反省することなく、他にばかり責任をおしつけてきた元帝に、いかにもふさわしい内容だといえなくもない。

## 元帝の処刑

元帝の処刑は、江陵陥落から十七日後、十二月十九日に執行された。

この刑殺においては、西魏関係者でなく、蕭簪のほうがりードしたらしい。彼は配下の傳準を派遣して、元帝の処刑にたちあわせた。元帝は死をまえにして、傳準に自作の詩（右の四篇）をつづった紙片をわたし、「貴殿

はぜひ、この詩を世につたえてほしい」といった。傳準は紙片をささげもったが、涙がでるのを禁じえなかった。やがて時間となり、係りの者が「元帝の頭上に」土囊を落下させた。元帝は土囊におしつぶされて、息がたえたのだった。享年四十七。

兄の簡文帝こと蕭綱も、侯景によって元帝とおなじような殺されかたをしている。この時期、北方ではこうした土囊を落下させて、圧死させるやりかたがふつうだったのだろうか。それとも、貴人を処刑するときだけの、例外的なやりかたなのだろうか。このあたりの事情については、私は寡聞にして知らない。博雅の士にお教えいただければさいわいである。

処刑がおわったのち、蕭簪は、叔父の死を確認した。あれほど憎悪した叔父の処刑とその遺体。蕭簪はどんな思いで処死のようすをきき、遺体をながめたのか、史書は黙ってかたっていない。やがて蕭簪は命令をくだし、布きれで元帝の屍をおおい、蒲がまのむしろでつつみ、さらに白茅でゆわえさせた。そして馬車にのせてはこび、津陽門外に埋葬したのである。

このとき、元帝の子の愍懷太子元良（第四子）と始安王方略（第十子）、そして簡文帝の子の桂陽王大成（簡文帝の第八子）らも、ともに殺害された。さらに、元帝に内城脱出を提案した謝答仁も、このときころされたのである。汝南王の蕭大封（簡文帝の第九子）や王褒以下は、みな捕虜となって、おびただしい珍宝や財貨とともに、西魏の都の長安へはこばれていった。

こうした悲劇は、名ある人びとにだけふりかかったのではない。西魏軍は、また、江陵にすんでいた男女数万人を奴婢として将兵にあたえ、やはり長安へつれさっていった。そして、北地への移動にたえられぬ幼弱な者は、すべて殺害されたのである。

哀話をひとつしるそう。

元帝につかえていた臣下のひとりに、殷不害という人物がいる。江陵陥落のおり、彼も兵をひきいて督戦していた。だが江陵が陥落したとき、彼は自分の母をみつしなうてしまふ。そのとき寒気はげしく、雪がつもり氷もあつくはって、戦死者や凍死者の死体が、あちこちの水路や塹壕に山積みになっていた。彼は市内をくまなくあるいて、母の遺体をさがしもとめた。水路のなかに死体があつたなら、そのたびにとびこんで、母ではないかとじつと確認するのである。おかげで身体中ここえてしまったが、それでも水さえ口にすることなく、大声でなきながら遺体をさがしまわった。かくすること七日、ようやくのことで母の遺体をみつけた。不害は遺体にすがりついてなきつづけ、道ゆくひとはこれを見て、涙をながさぬ者はいなかったという。

この話、たまたま殷不害が高位の者だったので、記録されたにすぎない。江陵陥落のおり、この種の悲劇はおびただしかったことだろう。いやもおうもなく奴隸とされ、長安につれさられていった男女数万人、そしてその場でころされた幼弱な人びと。彼ら無名の人びとの哀話は、ほとんど記録されることなく、歴史のかなたにうずもれたままである。

なお、この殷不害については、その後の経過をたどることができる。彼は母の遺体を仮埋葬したあと、例によつて長安に連行されていった。長安に到着しても、彼は母の喪に服して、粗衣粗食にあまんじていた。そのため、骨がうきでるまでにやせほそったという。この殷不害、北方に抑留されること二十一年、ようやくのことで南方にかえることができ、陳朝につかえた。そして陳隋の攻防中に、病没したのだった。当時としてはめずらしく、八十五まで<sup>よわい</sup>齢をかさねたという。

殷不害はもともと、苦学しながら立身し、梁武帝や簡文帝に信任されていた人物である。侯景たちが建康の宮

城に乱入したときも、簡文帝のそばをはなれず、しっかりと臣事しつづけたという。こういう実直な人物であればこそ、右のようなエピソードも生まれ、そして伝承されていったのだらう。

王褒のように西魏で厚遇されたもの、謝答仁のように殺害されたもの、庾信のように梁をしいつつ、北地で没したもの。変わり種として、顔之推のように西魏に連行されながら、のち北斉へ脱出していったもの。そして、役にたたぬとしてころされた無名の人びと——。江陵の陥落という事件は、さまざまなひとに、さまざまな運命をふりまいたのであった。

以上、各種の史書を依拠し、些少の私見をおりませながら、梁元帝の最期の日々を叙してきた。

本章で主要な資料としたのは、北宋の司馬光『資治通鑑』巻一六五における記述（胡三省の注もふくむ）である。それにくわえて、『梁書』『南史』の元帝紀や『三國典略』、さらに日本語でかかれた吉川忠夫『侯景の乱始末記』（中公新書）なども適宜参酌した。これ以外に参考にした文献については、本連載の末尾に一括してしめす予定である。

なお、西魏の総攻撃から元帝の降伏、書物の炎上、そして蕭詧の罵倒までを、十二月二日の一日のできごととしたのは、『通鑑』がそうしていたからである。一日にしては、あまりに事がらがつみこみすぎている。事実としては、おそらく二三日の幅があったらうとおもわれる（じつさい、へつの日づけにする資料もある）。だが、『通鑑』に依拠した以上、かってに時日のみ他書のものをつかって、都合よく調節するわけにもいかない。とりあえず、そのままとした。

この間における元帝の各様の言動やエピソードには、興味ぶかいものがすくなくない。元帝はなぜこうした死

をむかえねばならなかったのか。書物をやいておきながら、なぜ最期まで詩をつくりつづけたのか。なぜ親族とこれほどいがみあったのか。そもそも元帝とはどうした人間だったのか。以下の章では、こうした疑問をかんがえつつ、元帝という個性的な人物の生涯をおいかけてゆくことにしよう。